猪の一

スクナヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猪の一

【Ｎコード】
Ｎ５８８３Ｂ

【作者名】
スクナヒコ

【あらすじ】
　こんな季節に雪とか、どうかしてると思うな僕♪僕は全く関与してませんよ～っと。まぁ美女である僕こと猪の一の非日常を見せるわけですよ。まぁアレが混ざってるよ！とか、ソレじゃん！とか思っても文句は作者につければいいと思うし～♪あっ！そろそろ作業始めなきゃ……

冬に別れを告げて久しく、外はまだ名残惜しそうに冷たい風を吹かす。

　このぶんだと、今日にでも雪が降るだろう。

「というより、僕が降らすけどね！」

　一人つぶやきながらも、僕は手元の『こんぴーた』を手馴れた感じに扱っていく。

　この『こんぴーた』は名づけて『天候とか気候とかの極端な変化で性格を矯正してしまおう四号』

　無駄に長いうえ全てを説明してくれているネーミングは、センスを疑ってしまう。

そのうえ、四号という響きから分かるよう四機目。

　形は普通の九十年代のコンピュータにアンテナつけただけな感じなんですけどね。

「ふふふふふ……。今日こそこれで奴を真人間にしてみせる。つーか殺す」

　外では寒さに耐えられなくなった奴のＭＡＭＡさんが、変な仮面――（多分雪製）で人間をやめようとしている。

　あぁ、パパさんの血で仮面が赤く染まってゆく……キ・レ・イ（はぁと

　耳を澄ませば至る所で『ＵＷＲＹＹＹ！！』という声が聞こえてくるから、どうやら作業は順調なよう。

　まぁ、前回の『天候とか気候とかの極端な変化で性格を矯正してしまおう参号』と違って、パワー二十倍だしね。

　下手したら世界が凍るんじゃない？

　と、まぁそんな説明をしていたら忘れていた。

僕の名前は『猪の一』

　一応、生態フレームを機軸とした未来から来た女性型アンドロイ

ドだ。
ある目的のため、今は過去に移住している。
あっ、そこの君！今イタイと思ったでしょ！？
でも事実なんだからしょうがないじゃんね！つーか事実は小説より奇なり！
信じなさい！結局救われないでしょうけど！
一応言っとくけど、青い猫型じゃないからね！人型ですＹＯ！
参考として、黒いボブヘアーの髪型で（石頭ではない）服装は日ごとに変えてるし。
あんな年中裸の青色猫と一緒にしてほしくはない！
むしろ一緒にしないでくれ、大人の事情で！
まぁそんな感じで、今日も私は高らかに笑い声を上げる。
「あはははは！東京中を氷で包み、恭久（タカヒサ）もろとも砕いてくれるわぁああ！」
「ほう、いい度胸だな、イチ」
気づくと横にランドセルを背負った少年が立っていた。
いや、正直気配を絶って急に現れるのわいい加減やめて欲しい。
つーか！いつの間に帰ってきた、恭久！
「おいイチ、今お前が俺を呼び捨てにした気がしたのだが気のせいか？」
「いえ、恭久様！気のせいっス！勘違いっスよ！」
「そうか。では、俺の命取ろうとかも考えてないな？」
「イエス・サー！そんな発想すらなかったっス！凍死とか全く考えてないっス！」
「そうか。それではこれはなんだ？」
そういって彼が指差したのは、まぎれもなく僕の『天候とか気候とかの極端な変化で性格を矯正してしまおう四号』だった。
未来から、ある目的……まぁ『山田恭久の自然な抹殺、もしくは性格の矯正』という任務なのだけど、それを果たすために、多岐に

わたる秘密道具を持っている。
あぁ、そこで狸を想像しない！僕は彼が使えないような生態・化学兵器さえも普通に使えるんだからね！
まぁ、そんな物何回も使われたらさすがに気づくよね。
物憂げに外を眺めながら、僕は白い息を吐いてガラスを曇らせる。
とりあえず、聞こえなかったことにしよう。
「外は……酷い天気だね、寒くない？」
「話をそらすな、それはなんだ」
ちっ！どうやら聞こえなかったは無理らしいな。自分でも無理あるだろうと思ったし。
こうなったら開き直ってしまおう。
「『天候とか気候とかの極端な変化で性格を矯正してしまおう四号』だよ……僕の命令無しでは壊れるまで止まらない」
「ンじゃ止めろ、ご近所さんに迷惑だ」
外では彼の友人の変な頭—（言葉では表せない）が人間をやめている。
あいつはいい奴だったのにとか思うけど、この調子なら恭久ももうすぐに違いない。
「お前が発ｋｙ……あいつらみたいになったら止めてやるよ！」
「いや、俺はもうずいぶん昔に人間やめたから意味無いぞ？」
「へ？」
「しかも全環境対応型、太陽は俺にとって天敵ではない、大嫌いなだけだ」
「完全な存在（パーフェクトワン）！？」
「まぁいいや、止めないのならこうさせてもらう」
恭久様はそうおっしゃると、僕の『あぁもう面倒臭いからコントローラでいいや』をその手にとられると、そのまま握りつぶされましたっと♪
Ｗｈａｔ！？どんだけ握力高ぇんだよこの小五は！？
「む？前より堅くなっていたかな？」

それを握りつぶしたあんたは何者だよ……、さすがは未来で「Mr．Perfect」と呼ばれ、我々アンドロイドの天敵になる男。
彼は、握りつぶしたそれをコンパクト（大体十平方センチ位）にすると、それをゴミ箱に捨てた。
週一で取り替えるゴミ箱の中には、同じようなものが五個ぐらい転がっていたりする。
そして、彼はゆっくりとこちらを向くと、こういった。
「お仕置きだな」
考えてみれば、僕はよく今まで生きてきたものだな。
そう思った。

「以後、気をつけろよ」
「スイマセンでした」
プルプル震える猪の一に軽く蹴りを入れておく。
俺の名前は山田恭久（ヤマダタカヒサ）、小学五年生だ。
そこ、年齢のわりに老けた喋り方をするとか思わない。
しょうがあるまい、最近まで爺さんと二人で住んでいたのだから。
まぁ、それもこの娘が来るまでだったがな。
「ひっ！？ごめんなさい！ごめんなさい！」
むぅ、少々きつく起こりすぎたか？
個人的には俺の命を狙うコイツを気に入ってるのだがな。
ただ、爺さんの体が耐えられそうになかったから爺さんに教えてもらった本当の親のところに来た。
特殊な事情などはない、特筆すべきは我が一族は全員変人だということだ。
両親は、爺さんが一人ではかわいそうだと思ったらしいしから、間違っているともいえない。
まぁ、それだったらたまには来てやれとか家族全員で住めばいいとか思うが、それも含めて我が一族の変人性ともいえるし。
おっと、愚痴につき合わせてしまったか、すまんすまん。

まぁそんなわけで、今俺は多少のスリルと一緒に暮らしている。
「ところでイチ、饅頭を買ってきたぞ」
「ほんと!?どこどこ!?」
このように、イチに多少甘いというのは自覚しているのだが、多分恋心というものだろう。
友人が前にそう言っていた。
個人的には悪戯心だと自覚している、例えばそう、今の状況であると……
「いただきます!」
「そうだ、言い忘れていたがその饅頭、凍ってしまっているからな」
隣でガチンといういい音がした。
イチが口を閉じる勢いが止められないタイミングで言ったのだから当然だが、更に計算だと追加要素が……
「虫歯がぁあぁぁあぁぁあぁぁあ!!!!!!!!!!」
「ふははははは!地獄の苦しみの中、己の愚行を恥じるが良い」
「恭久!ここまで計算してただろう!お仕置きはさっきので十分だろう!」
「ふむ、十分とな?あの後父さんを蘇生して、母さんをはじめとする様々な方を人間に戻して、挙句の果てにお前の変わりに謝罪まで行った分がこの程度と?」
正直、今回のはやりすぎだと思う。
前回の『俺を十メートル間隔で狙撃』とか『夕飯の俺の肉だけマダラアカドクカエルの肉』とか俺単体を狙うのはいいが、他人に迷惑かけるのはよろしくないと思う。
「あのぅ、もしかして怒髪天?」
「はっはっは!そんなわけないだろう?まぁ夕食は全て単位一だな」
「ご飯一杯?」
「米一粒、味噌汁一滴、野菜一欠、肉無」
「今肉無しって言ったよね!?単位一じゃないの!?」
「うるさい居候」

「ガフゥ……」
隣で奇妙な声を上げるイチにひそかに微笑んでしまう。
やばい、俺きっとSだ。
まぁ仕置きはこのぐらいにしとくか、俺も饅頭でも食おう。
やたら膨らんでいて、注射針のあとがあるが気にするべきではないだろう。
そして俺は、今日も毒入り饅頭を口にした。

「おかしぃよね、彼」
おかしい、絶対おかしぃよ。
さっきの饅頭には仕返しも兼ねてアフリカ象も簡単に眠らせる睡眠薬、ぶっちゃけ人間に使ったら永眠薬をたっぷり入れといたのに……それなのに！
『む？味が落ちたか？』
NO！思わずツッコミしちまったよ！
気づいて！入れすぎたせいで溢れているその液体に！
まぁ僕の命が永らえたのも事実だけどさ。
「おいイチ、飯だ」
「どうせ単位一なら要りません」
「あれは嘘だ。本気にするな大馬鹿者」
「君の冗談はたまに笑えないんだよねぇ」
すこ～しいじけて言うと、彼はいつものようにその顔に笑みをうかべる。
まったく、小五でこのSッ気はどうしようもないと思う。
「ほら、行くぞ」
そういうと、恭久は僕の腕を取る。
小五という年齢に合わない力強さ、性格に僕は違和感を覚える。
僕は何のためにこの時代に来たのだろう。
僕はこの少年を殺したらどうするのだろう。
「今日はイチの好きなカボチャコロッケだそうだぞ？」

「ナニ？目的変更、カボチャコロッケの確保及びその独占に死力を尽くします」
「独占するな、食卓は皆で囲むものだ」
「むぅう！でもぉ！」
「まったく、俺の分をくれてやるから我慢しろ」
「フフッ、良かったね恭久！明日の命は助けてやろう！」
「はいはい、では行くぞ」
「は～い！」
食卓へ歩きながら考える。
今はこれでいい。
そして、彼はきっと。
難しいことは後で考えよう、彼を殺さない限り、彼の性格が変わらない限り終わりはこない。
どんなことがあっても変わりはしない。
どんなことがあっても死にはしない。
「ほらイチ、これで我慢しろよ」
僕の皿に二つのカボチャコロッケが舞い込んでくる。
「ふふふ、感謝感謝♪」
口の中に広がる甘さをかみ締めながら笑いあう。
彼は変わりはしない。
だけど、僕は変わっていっているのかもしれない。
それは、『Ｍｒ．Ｐｅｒｆｅｃｔ』と呼ばれる彼が恐れられる理由なのかもしれない。
そんな彼の笑顔を横に、今日もまた一日が終わっていった。

（後書き）

連載のほうはどうしたんだろうね♪

まぁ気づいてはいけないことに気づいたわけですよ。

文才のほうは言わずもがな、どうやら私―

月齢周期に作品のジャンルが左右されるっぽい。

あっはっは！どうりで連載のほうも回によって作風が変わったしまうと思ったよ！

まぁ何というかスイマセンm（＿＿）m

なにか感想がありましたら、なくても評価などしていただけますと、

凶器乱舞でございます（危い

今年は浪人決定したけど、暇見つけて頑張るぞ～

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5883b/

猪の一

2010年10月8日15時07分発行